

第4回弓ヶ浜セミナー（2014年5月21日開催）

## 全国的な城郭史と米子城

A study and compare Yonago castle into history of Japanese castle.

金澤 雄記\*\*

Yuuki KANAZAWA

### 概要

米子城は天正 19（1591）年に吉川広家が築城し、慶長 6（1601）年に中村一忠が増築した平山城である。特に建築年代の異なる大小 2 基の天守があったことが特徴であるが、明治 11（1878）年頃、天守を含め全ての建物が取り壊され、現在では石垣が残存するのみである。全国的な城郭史の中での米子城の位置付けと、特に近年における城郭の復元手法から米子城天守の復元の可能性を模索する。なお本稿は弓ヶ浜セミナーで約 30 分講演した内容を要約したものである。

### 1. はじめに

米子高専にお世話になって 2 年目になるが、実は 10 年前に修士論文で米子城小天守の復元研究を行っており、何かの縁で米子の地に流れ着いたのだと思っている。

本稿では 10 年前に行った小天守の復元研究<sup>1</sup>と、米子高専に着任して昨年度行った本丸の縄張りの復元研究<sup>2</sup>をもとに、米子城研究の現状を紹介し、今後の展望を述べたい。また大雑把な城郭史をまとめ、特に語られることの少ない明治期の廃城から現在に至るまでの動向の中で米子城天守の復元の可能性を模索してみたい。

### 2. 江戸期から現在に至るまでの全国的な城郭史

まず日本の城は大きく「中世山城」と「近世城郭」の 2 つに分けることができる。中世山城は急峻を利用して土塁や空堀で防衛線を築き、木柵で囲った室町時代以前の実戦向きの砦であり、建築物としては門や物見櫓、掘立柱の主殿などが要所に配置されていた。米子近辺では米子城の前身である飯山城や、米子城に移転前の尾高城などがあり、全国的には 2 万とも 4 万とも存在する。対して近世城郭は広大な敷地に高い石垣や水堀を巡らし堅固な城門や櫓を建て、最高所には天守がそびえる城郭で、

全国的には 100 余り存在する。

日本の城の一番の転換期は 1600 年の関ヶ原の戦いである。それまでは戦さにより城を攻め領地を取り合う群雄割拠の戦国時代であったが、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が江戸幕府を開府したため、一応のところは戦国の世が終わり、各武将の領地が決められた。そこで防衛拠点に加えて政治を行う機能を重視した近世城郭が必要となり、配置替えされた武将たちは新たな領地にこぞって築城を開始した。山陰では米子城が 1601 年に中村一忠が城の増改築を行い、同じく鳥取城でも 1602 年に池田長吉が渴殺して落城した中世山城を近世城郭に改築した。萩城は 1604 年に転封になった毛利輝元が、松江城は 1607 年に堀尾忠氏がそれぞれ新たに築城を開始した。この全国的な未曾有の築城ラッシュによって、短期間で築城技術が飛躍的に向上した。

次の転換期としては 1615 年の大坂夏の陣・冬の陣である。大坂城をめぐる史上最大の攻防戦の末、豊臣が滅亡し徳川安泰となり、その後幕府は反逆を恐れ軍縮のため、諸藩にこれ以上の築城を禁ずる「武家諸法度」と、1 藩に 1 城だけ残して残りの城は破脚を命ずる「一国一城令」を出した。この結果、原則的にこれ以降、新たな城を築くことができなくなり、事実上、日本の城はここで終焉を迎えた。

これ以降の長い江戸時代に、ごく限られた徳川方の城は新しく築城されたり再建されたりしたものもあるが、基本的には修復のみであった。また修理する際にも逐一幕府にお伺いを立てて許可を得なければならず、また原則元の通りに直さなければならなかった。

<sup>1</sup>拙稿「米子城小天守（四階櫓）の復元—幕末期—」日本建築学会計画系論文集、第 580 号、2004. 6、pp175-180、ならびに「米子城小天守（四階櫓）の復元—創建期—」同、第 585 号、2004. 11、pp155-160。

<sup>2</sup>拙稿「米子城の本丸部分における縄張りの復元的考察」『2014 年度学会大会（神戸）学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、2014. 8。

\* 原稿受理 平成 26 年 12 月 3 日

\*\* 建築学科助教

明治時代になり江戸の幕藩体制が終わると、新しい明治政府は江戸時代の封建社会の遺物を嫌い、その最たる象徴でもある城をことごとく壊してしまった。この時点で往時は150基以上存在した天守がほとんど取り壊され、21基まで減り、米子城も例に漏れず明治11(1878)年に廃城となり大小2基の天守が取り壊された。

さらに城の受難は続き、先の太平洋戦争の空襲で名古屋・広島・岡山・福山といった立派な天守が9基焼失してしまった。そのため江戸時代から現存する天守は姫路・松本・犬山・彦根城天守(以上国宝)などわずか12基にすぎない。

戦後、昭和30~40年代になると戦後復興の一環として町のシンボリックな天守を建て直す動きがあり、約25基の

天守がこの時期に鉄筋コンクリートで「外観復元」された。中には観光目的のため史実に基づかない昭和デザインの「模擬天守」を建てた事例も多々あり、日本中に天守が乱立した第2次築城ブームと呼ぶべき時代であった。鳥取県では河原城や羽衣石城に史実に基づかない模擬天守が建っている。仮に米子城もこの時期に復元が試みられていれば、鉄筋コンクリートの史実に基づかない天守が建っていただろう。

平成に入り、模擬復元では間違った歴史認識を与えてしまうため、現在では発掘調査や史料に基づいて可能な限り昔と同じままの「木造完全復元」の天守が建てられる風潮になった。現在のところ、白河小峰・首里・掛川・白石・新発田・大洲城に木造で天守が復元された(表1)。

表1 全国の再建天守一覧

	損失年代	損失理由	再建年代	再建種別	構造	設計	差異
洲本城天守	1615年	一国一城令	昭和3年	復興	RC造		—
大坂城天守	1665年	落雷焼失	昭和6年	復興	SRC造		意匠変更(徳川天守台に豊臣天守風意匠一故意的)
郡上八幡城天守	—	—	昭和8年	模擬復元	木造		—
伊賀上野城天守	—	—	昭和10年	模擬復元	木造		—
岸和田城天守	1827年	落雷焼失	昭和29年	復興	RC造		意匠変更(資料不足—絵図のみ)
富山城天守	—	—	昭和29年	模擬復元	RC造		—
岐阜城天守	1601年	廃城	昭和31年	復興	RC造	城戸久	意匠変更(資料不足—絵図のみ)
名古屋城天守	1945年	戦災焼失	昭和32年	外観復元	SRC造		最上階窓形状、内部階数変更
浜松城天守	—	—	昭和33年	模擬復元	RC造	城戸久	—
大垣城天守	1945年	戦災焼失	昭和33年	外観復元	RC造		—
広島城天守	1945年	戦災焼失	昭和33年	外観復元	SRC造		付櫓形状
和歌山城天守	1945年	戦災焼失	昭和33年	外観復元	RC造	藤岡通夫	—
岡崎城天守	1873年	廃城	昭和34年	外観復元	RC造	城戸久	最上階廻縁付設
小倉城天守	1837年	焼失	昭和34年	模擬復元	RC造	藤岡通夫	意匠変更(破風の増設)
小田原城天守	1633年	地震倒壊	昭和35年	外観復元	RC造	藤岡通夫	最上階廻縁付設
松前城天守	1949年	失火焼失	昭和35年	外観復元	RC造	大岡實	—
熊本城大小天守	1877年	焼失	昭和35年	外観復元	RC造	藤岡通夫	—
岩国城天守	1615年	一国一城令	昭和37年	外観復元	RC造	藤岡通夫	場所変更
平戸城天守	1871年	廃城	昭和37年	外観復元	RC造	藤岡通夫	場所変更(資料不足—絵図のみ)
島原城天守	1874年	廃城	昭和39年	外観復元	RC造	藤岡通夫	意匠変更(資料不足—絵図のみ)
中津城天守	—	—	昭和39年	模擬復元	RC造	藤岡通夫	—
会津若松城天守	1874年	廃城	昭和40年	外観復元	RC造	藤岡通夫	—
福山城天守	1945年	戦災焼失	昭和41年	外観復元	RC造		窓形状、鉄板張り外壁復元せず
唐津城天守	—	—	昭和41年	模擬復元	RC造	藤岡通夫	—
岡山城天守	1945年	戦災焼失	昭和41年	外観復元	RC造		地下増築・下見板張り意匠・窓意匠
越前大野城天守	1775年	焼失	昭和44年	復興	RC造		—
高島城天守	1875年	廃城	昭和45年	外観復元	RC造	大岡實	最上階廻縁付設
大多喜城天守	1843年	焼失	昭和50年	外観復元	RC造	藤岡通夫	(資料不足—絵図のみ)
久留里城天守	1872年	廃城	昭和54年	模擬復元	RC造	城戸久	場所変更、意匠変更(資料なし)
今治城天守	1610年	解体	昭和55年	模擬復元	RC造	藤岡通夫	場所変更、意匠変更(資料なし)
長浜城天守	1615年	一国一城令	昭和60年	模擬復元	RC造	藤岡通夫	(資料なし)
福知山城天守	1871年	廃城	昭和61年	外観復元	RC造	藤岡通夫	—
忍城三重櫓	1873年	廃城	昭和63年	外観復元	RC造		(資料不足—絵図のみ)
白河小峰城三重櫓	1867年	焼失	平成3年	木造復元	木造	宮上茂隆	—
首里城正殿	1945年	戦災焼失	平成4年	木造復元	木造		—
高田城三重櫓	1870年	焼失	平成6年	外観復元	木造	内藤晶	(資料不足—絵図のみ)
掛川城天守	1854年	地震倒壊	平成6年	木造復元	木造	宮上茂隆	—
白石城大櫓	1871年	廃城	平成7年	木造復元	木造		—
新発田城三階櫓	1872年	廃城	平成16年	木造復元	木造		—
大洲城天守	1888年	廃城	平成16年	木造復元	木造	宮上茂隆	—

その他、天守だけでなく御殿や櫓・門といった建物も木造で復元されるようになった。例えば熊本城・名古屋城の本丸御殿が木造復元され、松江城にも3基の櫓が木造で完全復元された。これは観光目的の史実に基づかない非木造の建物が再建できなくなったとも言え、それだけ城に関する詳細な歴史史料の発見や精緻な研究が求められる時代になったとも言い換えられる。

以上、近世城郭は短命であったことや、天守の残存数は少ないこと、また現在は第3次築城ブームの真っ只中であることを述べた。

### 3. 米子城の歴史

米子城の歴史は、応仁から文明年間（1467～1487年）に山名宗之が飯山に砦を築いたことから始まる。飯山城は現在の米子城本丸がある湊山ではなく、国道9号線向かいの小山にあった。なぜより高い湊山に城を築かなかったのか疑問だが、中世当時の城にはもちろん高石垣や天守など存在しない山城であったわけで、狼煙台程度の砦であったとするならば、あまり比高の高い山は不便であったとも考えられる。

本格的な近世城郭が築かれたのは、吉川広家が築城を開始した天正19（1591）年からである。近世城郭は関ヶ原の戦い後の1600年からと前述したが、安土城・大坂城などと同様に、米子城はそれ以前に築城されたかなり早い段階の近世城郭として注目できる。しかし築城開始後すぐの1592～1598年に広家は「文禄・慶長の役」で朝鮮出兵した。また帰国後すぐに今度は関ヶ原の戦いが起きたので、米子城は未完成のままであった。広家がどこま

で城を築いていたのかは定かでないが、三重四階の天守（後の小天守）は完成していたと考えられる。

関ヶ原の戦いで毛利輝元は西軍の総大将であったため敗戦大名となり、広島城から山口県の萩へ減封となった。家臣であった広家も米子から同じく山口県の岩国へ減封となり、岩国へ新たに岩国城を築いた。

代わって関ヶ原の戦いの後、米子城には中村一忠が入り、増改築を行ってようやく城を完成させた。一忠は広家の天守より一回り大きな四重五階の天守を新しく築いた。外観は広家の天守とよく似ていたが、内部は新しい技術で築かれていたと思われる。

その後、江戸期を通じて城の増改築はなかったが、嘉永5（1852）年に小天守台の石垣を積み直す大修理を行った。しかし修理まもなく明治期を迎え、明治11年廃城とともに取り壊された。

以上、米子城には関ヶ原の戦いを挟んで建築年代の異なる2基の大小天守が存在したことが特徴的である。

### 4. 米子城大小天守の史料

米子城天守の概要を示す史料には、まず江戸中後期に描かれた城の修復願いの絵図の控えが約20枚（図1）あるが、稚拙な絵画史料のため詳細を知ることができない。その他、大天守に関しては明治11年頃撮影された古写真（図2）が1枚のみある。小天守に関しては幕末の修理の際に描かれた指図（図3）がある。指図は柱や梁組など建物の概要を詳細に描いた1級史料であり、天守の指図が残る事例は全国的にもごくわずかである。



図1 「伯州米子之図」  
鳥取県立博物館蔵  
2基の天守の各階の規模や高さが記されている。



図2 米子城大天守古写真  
手前にあるはずの小天守はすでに取り壊されている。

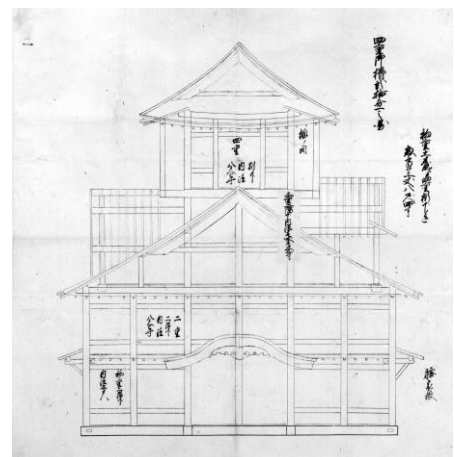


図3 「四重御櫓式拾分一之図」  
鳥取県立博物館蔵  
立面図と断面図を兼ねた建地割図。これ以外に各階平面図も存在する。

## 5. 米子城大天守の復元

以上の史料をもとに、大天守に関してはこれまで松岡利郎・三浦正幸により2度復元が試みられている(図4)。両者の大きな違いは屋根形状と上部の規模である。大天守に関しては古写真より概ね外形は分かるものの、内部構造が一切分からないのが現状である。

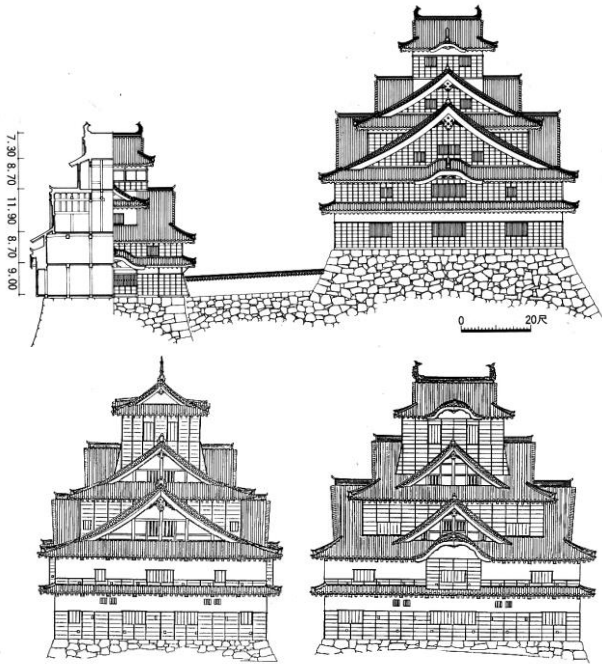


図4 米子城大天守の復元案

上：松岡利郎案

出典：『山陰の城』小学館、1981.10、p154

下：三浦正幸案

出典：三浦正幸「伯耆の米子城の復元」『日本建築学会中国支部研究報告書』第17巻、1992.3、pp401-404

## 6. 米子城小天守の復元

小天守に関しては詳細な指図が残るため、ここでは詳細を割愛するが、指図に従い、各階平面図・両面断面図・全面立面図を描くと図5のようなになる(紙面の関係上、立面図1枚と各階平面図のみ掲載)。特に二階の小屋組が複雑であるが、指図をもとに模型が作れるほど正確な復元が可能であった。

ここで1つ注意したいのは、指図が描かれたのは幕末の修理の際であるため、復元した小天守は幕末の姿であり、何らかの改造が加えられた後の姿ということである。

そこで再度創建時の姿に復元を試みた。これまた詳細は割愛するが、一番の大きな改造は最上階を板壁で覆ったことで、仮設的な板壁をはずせば、もとはいわゆる廻縁が巡っていたことが分かった。板壁で覆ってしまった理由は、山陰の厳しい風雪のため廻縁が傷んだからである。こうして復元してみると、大小天守とも幕末時には最上階が板壁で覆われており、古写真に写る大天守の最上部が何か火の見櫓のようなずんぐりとした形状になっている理由がうなずける。

以上、復元した小天守の建築的な特徴としては、一階平面が石垣に合わせて大きく不等五角形に歪んでいることが挙げられる。これは初期の石垣は技術が未熟で、崩れやすい角を直角に築くことができず、鈍角になってしまい、正確な矩形の石垣を築けなかったためである。

遅れて築かれた大天守台石垣は正確な矩形で築かれており、現状の石垣を見るだけでも大小天守の時代が異なることが確認できる。その他、計4つの石落しが一階に取り付くことも、より実戦的な天守として築かれたといえる。

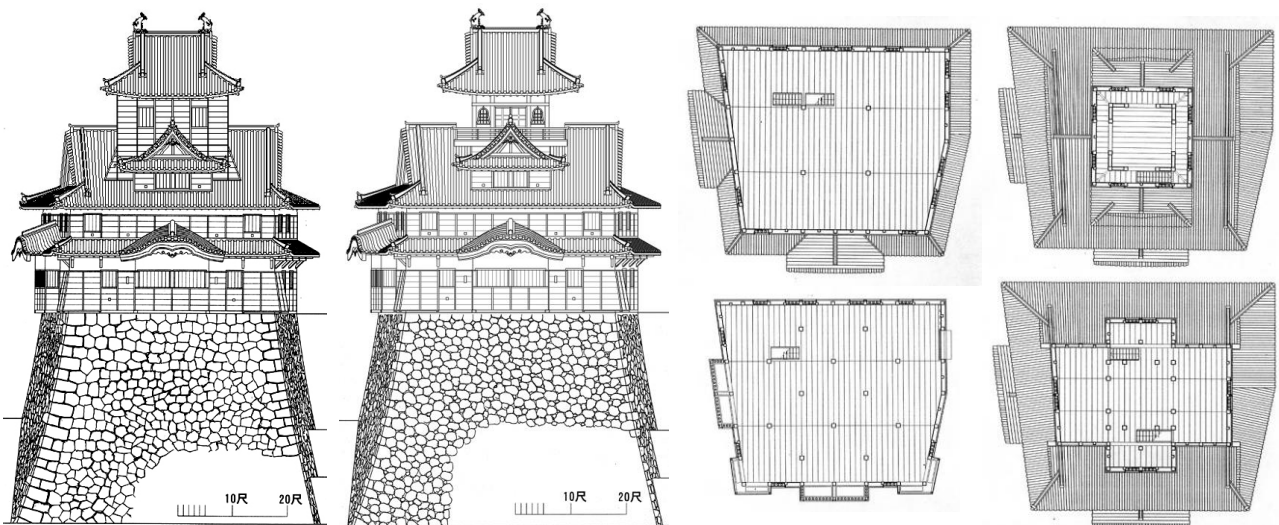


図5 米子城小天守の復元図

左：幕末時立面図、中：創建時立面図、右：幕末時平面図

## 7. 米子城本丸の縄張りの復元

次に、前述したように吉川広家がどこまで城を築いていたか明らかにしたい。

まず残存する石垣をみると、現状の縄張りには不自然な点が以下3点ある。

- ・大小天守が連結しておらず土塀で接続するのみ
  - ー通常2基以上天守が存在する場合、連結・連立（渡櫓で接続）するか、せめて同じ天守台石垣に建つ
- ・小天守にスロープ状の土橋で下って入る
  - ー通常、付櫓か石段あるいは穴蔵から登る
- ・小天守が最高所になく、本丸天守曲輪が高い
  - ー例外を除き、天守は本丸最高所にある

以上は中村の増築の結果と考えられる。そこで2013年度に吉川の築城範囲を特定し、本丸部分における吉川時代の縄張りを復元考察した。

その手法としては2つあり、まずは現状の石垣を場所ごとに年代判定して吉川時代の石垣を探すことである。もう1つは小天守が吉川の時代の天守と仮定して、天守は最高所にあるという常識から、小天守より高い部分は中村の増築と合理的に証明する手法である。

まず、米子城本丸に残る現状の石垣を見ると、以下のよう4つの時代の石垣に区分することができる。

1. 吉川創建時の石垣（図6の中で「吉」と示す部分）  
小ぶりの自然石による野面積み。算木積み未発達。
2. 中村増築時の石垣（同「中」と示す部分）  
比較的大きな自然石による野面積み。角が算木積み。
3. 幕末修理時の積み直しの石垣（同「幕」と示す部分）  
割り石による切込ハギ積み。
4. 近年の積み直しの石垣（同「直」と示す部分）  
黒っぽい割り石による打込ハギ積み。昭和58～59年ならびに平成12年鳥取県西部地震後の積み直し。

以上、本丸における石垣を年代判別したものが図7である。概ね、本丸下段には吉川時代の石垣が残存し、大天守台には発達した中村時代の石垣がみられる。小天守台は幕末に修理されたため切込ハギ積みである。それ以外の大部分は近年の積み直しであり、石垣の年代判別のみで吉川時代の縄張りを推定するのは現状では難しい。

次に天守は最高所にあるという前提で、吉川天守より高い位置にある部分は中村による増築部分と仮定した。そこで本丸における各所のレベル差を測量し、吉川天守との相対的なレベル差を図7に重ねて示す。大天守・天守曲輪・水の手曲輪が小天守（吉川天守）より高い位置にあることが測量の結果で分かった。

以上、現地調査と論理的な推察をもとに吉川創建時の縄張りを推定復元すると図8のようになる。復元した本丸の特徴は以下5つある。

- ・天守（後の小天守）は本丸より一段高く設けられており、独立して建っていたこと。
- ・着見曲輪と大天守下の部分（現状で犬走り）のレベルがほぼ等しいことから、本来同じレベルでつながっており、そこが本丸中心部（天守曲輪）だということ。
- ・吉川時代の石垣が東と西の2ヶ所（図8の○A・Bで示した部分）が途切れており、そこから先は中村時代の石垣がみられるため、途切れている部分より先は築いていなかったということ。
- ・本丸中心部に入る部分（図8の□Cの部分）が桁形ではなくスロープ状になっており、築城の部材搬入口だったのではないかということ（築城後は掘り戻すつもりだったと考えられる）。
- ・吉川は築城途中であったこと（朝鮮出兵のため）。

ここで復元した吉川時代の縄張りを絵図などの史料から実証することはできないが、修理願絵図（図9）により幕末に崩壊した石垣部分は今回復元した吉川の縄張りの石垣部分と全て合致することが指摘できる。これは吉川時代の石垣の造成技術が未熟であるがゆえ、崩壊したことを示している。なお小天守台（図8中のa）は幕末に豪商鹿島氏の金銭的援助により積み直しているが、大天守下部分（図8中のb）は修理許可が出ず、昭和58年の修理まで崩れたままであったようである（図10）。

なお第7章は2013年度本校卒業生永井萌の卒業研究を要約したものである。内容に関してはまた別稿で詳しく書き改めたい。



図6 米子城本丸部分の石垣の時代区分

## 8. おわりに

以上、米子城についての現状までの研究成果を書き連ねてみた。天守に限っていえば、小天守は指図より完全木造復元可能なほど内部を詳細に復元することができるが、大天守は古写真より外観が概ね分かるものの、内部が全く不明であることを示した。さらに現状の縄張りがかなり不自然であるが、これは増築の結果であり、吉川時代の縄張りに復元すれば小天守が吉川創建の天守であると断定できることなどをまとめた。

とはいえ米子城にはまだまだ研究の余地がある。二の丸に存在した御殿は絵図が残っているが復元研究されておらず、また天守や御殿だけでなく、櫓や門といった建築物も未知の世界である。さらに旧城下に約500棟残存する町家もほぼ調査されていない。今後約10年を目処にこれらの研究を進め、いずれは天守復元のような機運が高まれば幸いである。

### ■先行研究

- ・城戸久「米子城天守と四階櫓」、『名古屋工業大学学報』第2号、1950.12、pp14-24。
- ・松岡利郎氏『山陰の城』小学館、1989.10、p.154。
- ・三浦正幸「伯耆の米子城の復元」『日本建築学会中国支部研究報告書』第17巻、1992.3、pp401-404。

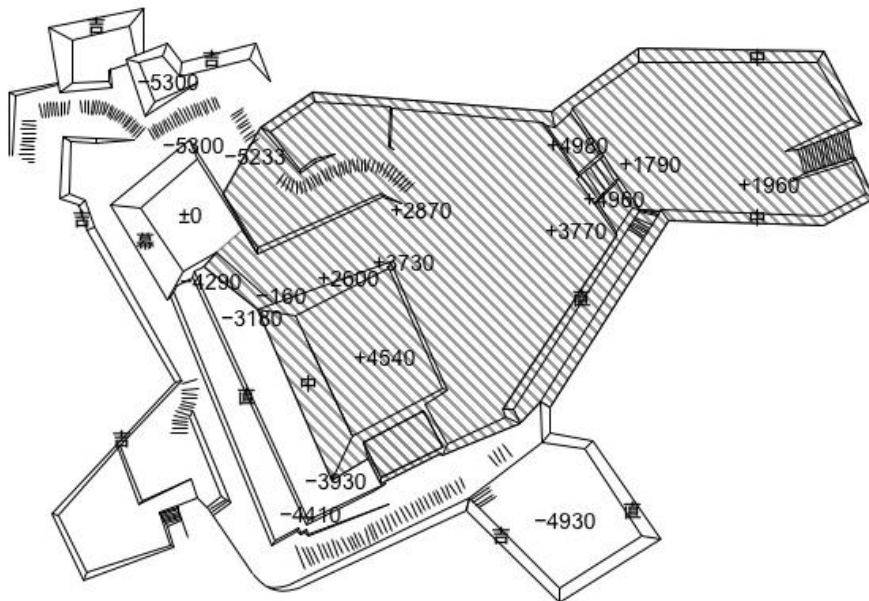


図7 米子城本丸の現状縄張り図 (永井萌作図)  
 数値は小天守台を0としたときの相対レベル差  
 (斜線部は小天守よりレベルが高い部分)  
 吉・中・幕・直は石垣の年代区分 (本文参照)  
 曲輪名は本稿で便宜上つけたもの

### ■参考文献

- ・金澤雄記「米子城」『よみがえる日本の城6』学習研究社、2004.10、pp46-51。
- ・金澤雄記、「米子城天守」『日本の城』第23号、デアゴスティーニジャパン、2013.7、pp.1-4。
- ・金澤雄記、「米子城縄張り」『日本の城』第53号、デアゴスティーニジャパン、2014.1、pp.5-6。

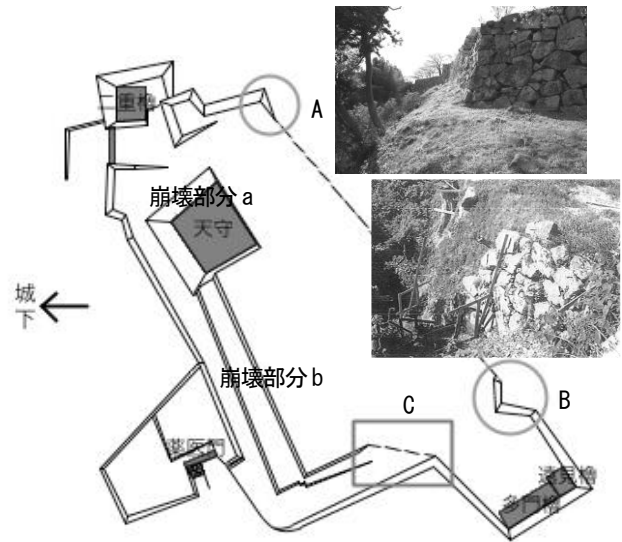


図8 吉川時代の縄張り推定復元図 (永井萌作図)  
 右写真は両端の途切れた石垣部分

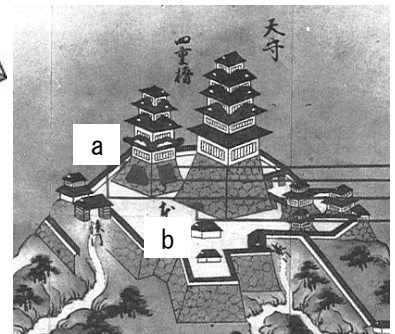


図9 「伯耆国米子城絵図」  
 鳥取県立博物館蔵



図10 崩壊部分 b (S58)  
 米子市教委提供